

『ベルリン物語集』 作品論(続)

酒 井 府

(VI)

第十一作として登場するのは、Jürgen Leskien の『聖木曜日』(Gründonnerstag) であり、短い作品である。Jürgen Leskien は此のアンソロジーに収録されている Stasi の記録文書、75 年 11 月 25 日付けで、IM »Hermann« が今後の接触を示唆し、事実 76 年 1 月 29 日、当局側の作家同盟中央幹部後進担当係の Erika Büttner と対談し、アンソロジーへの参加を撤回はしなかったが、或る程度の協力をした作家である。⁴⁰⁾

物語は八年前に旋盤により一本の指を失い、それ故に Krallen (指先) と呼ばれている三十五歳の旋盤工を主人公にしている。彼は当時の妻でドイツ語と歴史の教員 Annemarie と今は離婚しており、その八年前に生まれ、元の妻に親権が認められた娘 Katja に、発育と教育の為にと言う彼女の主張が国民教育課に認められた故に、会う事を禁ぜられている。しかし今、彼は納得が行かず、水曜日と金曜日は、正午直前に工場を抜け出し、自転車で娘の通う学校へ駆けつける為、職場の時計ばかり気にするのである。此の日も彼はそれを敢行し、自転車で突っ走り、シュレーパー菜園を通り抜け、公園の外れで自転車から降り、意気を切らして丘を駆け上る。そこで彼が双眼鏡で眼にしたのはグレーの建設現場の塀で囲まれた娘の学校であり、彼等がその囲いを築いたと知り、全ての努力が無駄であったと彼は思う。彼は塀の所へ行く。塀は高く長い。見えるのはジャングルジムのみである。彼はその剥がれやすい板を探す、塀は堅い。差し当たって彼は鉄道高架線の側の庭園風レストランの籐椅子に座り考える。彼と娘との接触を禁ずる為の囲いとは！「それは子供等を生から遠ざける。」⁴¹⁾ と。

此の辺りより作者の、女性の権利を重んずる余り、男性や子供が蔑ろにされる DDR の事態への批判が読み取れないわけでもない。その様な描写はその後も続く。彼はコーヒーを飲んでから、午後に錆び付いた一本の水道管を見つけ、塀の板を音を立てて引き剥がし、内側より驚いて見ていた老守衛を無視して侵入する。校舎の階段の所で彼を阻止しようとするその男を押しのけ、何処かで誰かがピアノを引いている校舎の廊下を歩き、娘のいるべき教室へ行く。しかし授業は終了しており、教室は空である。そこで彼は娘に思いを馳せ、娘の席へ行き、座り、両腕の上に頭をのせ、ピアノの音を聞く。そこへ例の老守衛が背の高い警官を連れて来る。ピアノの音が止む。一緒に来るよう警官に言われた彼は、守衛の背後に彼の元妻 Annemarie を見る。彼女が事態を私達に任せて下さいと言い、老守衛が Kralle の不法侵入と彼を押しのけた際の暴力を体の青痣を示して訴えるが、結局、警官は囲いの外で事情聴取をし、Kralle が説明し、警官は六歳の彼の息子が九月より此の学校へ通うことを述べ、剥がれた塀の板を石で直し去って行く。

物語はその後の成り行きを示すことなく、翌朝 Kralle が「では私の時間から三・四時間、引いておいてくれ。どちらでも良いが。そう、そして私は新しい学校のジャングルジムを塗ってくる。あの公園の所の。あそこに彼等はともかく建てるのだ。」⁴²⁾ と言い彼と娘の事を知っている作業班の同意と支援を受け、前日取り上げられた自転車の代わりに、同僚の自転車で出発する所で終わる。此の作品に対する Stasi の批判は全くない。

『ベルリン物語集』の第十二作として収録されているのは、此の物語集、三人の編集者の一人として、一貫して当局よりマークされ、批判の対象に晒されてきた U. Plenzdorf の作品『下にも遠くにも』(kein runter kein fern) である。此の作品の固有名詞以外は名詞動詞を問わず多くが小文字で書かれ、大文字で記される名詞もあり、ピリオド、コンマは文章によってはあるべき所に打たれておらず、語り手の主語が大文字の ICH であったり、小文字の ich であったり、また二人称、三人称も大文字で記されたり、小文字で表記されたり、rocho、rochorepocho、rochorepochopipoar、EIKENNGETTTOSETTISFEKSCHIN の

如き私には意味不明の言葉も随所に挟まれ、その上、三人称が何を支持するのか判断困難な所もあり、幾つかの文章理解に拘泥し、十五頁に亘る作品を読み通すのに、苦勞する。

しかし全体を読み通して理解しうる事は、主人公が MAMA と呼ぶ母が西側に亡命し、彼の兄弟と思われる MICK、Jonn、Bill 三人も西ベルリンに移住し、東側に来る事が東側の当局に拒まれている MICK に会うために、語り手の主人公は、ベルリンの壁に近くて、全ベルリンから見える高い西側の象徴的建築物 Springerhaus の屋上に立つ MICK に会う為に壁際へ行くのである。そして MICK に会いに行った今、東側では DDR 建国二十周年を祝うパレードが、MICK からはさておき、主人公から見て下でも、遠くでもない場所で開催され、それに参加出来ない事を残念に思う東側に残ったもう一人の兄弟、警察官 Mfred は無骨者として描かれる。語り手の狂った語りとは対照的に、そのパレードの描写は通常の文で表現され、棚引く赤旗、鐘の音、行進曲、Walter Ulbricht を先頭にした壇上に並ぶ党と政府の代表達、陸海空軍の兵士達、我々の労農国家、我々の首都、マルクス・エンゲルス広場等々が読み方によっては無味乾燥なパロディー化された言葉で書かれている。

その上、此の正常な文で表現される示威運動の場面は此のかなり長い作品の中で、狂人と取れないわけでもない主人公の語りの合間に再三登場する。また、「私は一人の男を知っている。その男を彼等(注 DDR 当局)は採用した。ノーマルかどうかの試験に受ければ、ポーランド、チェコ、ハンガリー、ソ連邦の首都が何か、それが、ワルシャワ、プラハ、ブダペスト、モスクワであると知っていれば。」⁴³⁾ という表現や、Mfred が自己を変えようと思ったら、「彼は私に西のチューインガムを買うべきで、住居に西の物は何も置いてならぬとか、西は我々を側面から攻撃しようとしているとか、言うのを止めるべきだ。MICK は側面から攻撃しようとしないうし、Bill と彼等と Jonn もそうである。そして西では行きたい所へ行けるし、西では欲しい物を買えるし、西では彼等は自由であり、MAMA は西にいる。— お前達の母は共和国を裏切ったし、我々三人は今、全く一緒に、今は協力し、家計も共同だ、と MICK は毎日三

度、言わざるを得ない。』⁴⁴⁾ という表現は当然 Stasi や当局には受け入れられないものである。更に「精神薄弱はしかし、資本主義の、いや待て、資本主義の或る結果に過ぎない。社会主義では何処に精神薄弱の温床があると言うのか！ 社会主義では何処に癌の温床があると言うのか？ 癌は或る病である。精神薄弱もそうである。』⁴⁵⁾ という言葉を文字通りに受け取る人はいないであろうし、Stasi や当局もそうである。その事は 76 年 3 月 12 日付けの Renate なる人物の作家同盟第一書記 Gerhard Henniger 宛の書簡に明かであり⁴⁶⁾、此の人物が Plenzdorf はひどい物を書き、それはほんの少数の消息通に解読されると作者は知っており、一般の読者も文学通もどうする事も出来ないと言っているのは正に正鵠を射ており、私が理解しがたいのも当然と言える。これが正に当局の Plenzdorf に対する批判的姿勢である。

此の人物はまた此の作品の主人公が、MAMA という言葉を連発する所に、いつも安全な母胎に回帰する病的欲望を見て、そこに世代への憎悪、父親憎悪を見ているのは当局の立場から言えば当然であり⁴⁷⁾、そこに Plenzdorf が体制批判を託している事も納得が行く。また主人公が西側にいる母親の手引きで当局に気付かれずに、壁を越え西側に移住する事を夢想する場面も DDR にとっては批判の対象となろう。⁴⁸⁾

此の作品集の第十三作は当局よりやはり批判の対象としてマークされていた編集者の一人 Klaus Schlesinger の『青春の終わりに』(Am Ende der Jugend) である。作品の舞台は 61 年 8 月 13 日のあの東西ベルリン境界封鎖当日であり、主人公は二十四歳の血清学研究所の技術助手 Gottfried で、当時やはり同年齢であった作者を髣髴とさせるものが十分にある。当日の朝、彼は夢を見る。両親の部屋のベットに座りその住居のドアを叩かれ、彼の知っている声で名を呼ばれるが、麻痺した如く身動きが出来ない。しかし夢の中でそれはドアを叩く音ではなく、箱形大時計の中の音である事に気が付き、そこから飛びだした筋肉質の小人物に入れ墨入りの手で首を絞められる。その夢には人で一杯の教室や黒い衣装を着て厳しい視線で講壇の背後より、二人の看守に付き添われたベンチの上の彼を見つめ、彼が誰か問いつめる以前の英語の女教師が現れる。あ

る種の悪夢であり、此の作品の重要な人物 Martin も登場し、看守の方に屈み、彼に「心配するな！ 私はお前が問題の時点に俺の所に居たと何れの場合にも証言するだろう！」と言う。Martin は彼の左肩に手を置き、彼は最初は安堵感を抱くが、それはあたかも彼の中で誠実な感情が損なわれたかの如き狼狽に変わる。そこで再びドアの音がより強くなり、彼は現在の彼の住居で目覚め、ドアを開けると、予想した Martin ではなく Rosenberg が居て、急いで研究所に行こうと即し、事件を未だ知らない彼に早朝国境が閉鎖されたと言う。夢事態がこの日に起きる出来事を暗示している。

彼が外へ出ると、街路は国家の記念日以外に見られない多くの人々で溢れ、彼等はグループをなして国境の方へ信じられないと言う顔付きで走って行く。彼は初めてベルリンへ来た時の、その街の灰色で重苦しい敵対的雰囲気を出し、Martin を訪ねるが会えない。此处で作者は Martin の隣人 Erlwein 夫人の、街に兵士が溢れている状況を見ての戦争への危機感、彼が電話をした映画俳優 Manfred Schwager の不在とその夫人の戻って来ない夫への泣きながらの危機、街を走る軍用トラックと兵士達、DDR のプロパガンダとしての横断幕、至る所に見られる武装民兵隊による横断禁止、頭を振り、腕を激しく動かす両側の民衆を描写する。親戚の通行を心配する女性達。此处は当局や Stasi によって決して望ましい叙述とは思えない。家へ一度戻ろうとして、彼は Martin に途中で会い、飲み屋へ二人は入る。そこで会話をする二人に背の高い酔った大戦以前からの建築労働者の職人頭が絡み、彼等が此の街を築いたのに、奴らが今駄目になると DDR 指導部を非難する。その様に事態を見るべきでないと言う Martin がベルリン出身でない事を理由に反論を封じ、その男は近くのテーブルの仲間が命に関わるぞと遮るにも係わらず此の街ベルリンを駄目にする犯罪者達として顎髭男、つまり当時の DDR の国家評議会議長 Ulbricht の事を口にする。その様に事態を見るべきでないと繰り返す Martin を別の男が押し、ビールがこぼれ、グラスが割れ、Martin と主人公 Gottfried は男達に囲まれるが、飲み屋の主人の介入で二人は外へ逃れる。此の場面の描写も当局には歓迎されないと思われる。

午後四時、彼等は東西ベルリンの境界に接する研究所の病院に到着する。Martin は傷を負い、血を流している。そこにも武装民兵隊がいる。此处では彼等以外に様々な人物が登場する。長と思われる Racholl、負傷に気付く Rosenberg、傷の手当てをする Schnabel 博士、実験助手の Messemer である。病院の西側は境界線であり、主人公 Gottfried の実験室の窓からは行軍用装備とマシンガンを装備した国境警備隊が行進するのが見える。「私は思うのだが、此の日は此の国家が建設されて以来、最も重要な日である。そう、おそらく此の日はドイツ社会主義国家の真の誕生時ですらある。」⁴⁹⁾ と Rosenberg は語り、誰も異論は唱えない。しかし Schnabel 博士は早朝より Wilhelmsruh から Potsdamer Platz 迄全境界を走り、Pankow で、東側が角の家を占有するのを忘れ、人々が一時間たつぷり東側のドアから入り、別のドアを通して西側へ再び出て行った事を語り、ドクター試験受験者は通りの一方の側の家々の正面は東に属するが、その前の歩道は既に西側に属していた Bernauer で人々が窓からマットレスや羽布団の上に飛び降りた事、一人は五階からすら飛び降りた事を耳にしたと語る。⁵⁰⁾ 現在の我々にとっては既知の事実であるが、70 年代に此の事を作品の中に記載する事はやはり当局や Stasi にはチェックするに値したであろう。「遅かれ早かれその様な事は分かりきった事だ」と断定する Rosenberg に対し、ドクター試験受験者は最近毎日三千人が西へ移住し、そのカーブが上昇している事実にも触れる。しかし今やそれがゼロになると言う Rosenberg と、Martin と自分を除いて喜んで笑う 同僚に対し、実験助手の Messemer が述べる以下の意見は、笑わなかった暗示的な Martin の姿勢と共に此の作品の重要な点であると言えよう。「私は貴男方がその事にどうして笑うのか判りません。私がそれに反対でない事は判って下さい。私はただ、去ったり窓からすら飛び降りるそれぞれの人間の背後にはしかし運命があると思うのです、…私は各人がともかく何かであり…そう…或る種の権利を…そう…自分自身と自分の生について持っていると思うのです。」⁵¹⁾ Rosenberg は当然、その意見をブルジョア的だと斥け、移転の自由等は彼等の国を体系的に破壊すると言い、階級闘争を強調し、Messemer を黙らせる。Schnabel 博士の、彼は原則を述べ、個人と社

会の矛盾を考えていると言う取りなしも無視し、Rosenberg はその矛先を Martin へ向け彼の意見を強引に聞こうとする。Martin は優れた血清学技術者であり、周囲から認められている。彼は煙草に火を付け「一人の人間がその前に立たされるべきでなかった二者択一がある。」⁵²⁾と述べ、満足と言うより憤慨する相手にそれ以上は語ろうとしない。その時、電話が鳴り、Racholl が研究所の病院の、直接境界に接する北西部の放射線部へ行くといい、彼等も行く事にする。

彼等は、ほんの僅かで境界に達する通りに面し、閉鎖されていると知っているドアの前に到達する。Gottfried はそのドアを開けると何が起こったか知っていたらその取っ手を下ろしたかどうか現在でも自問するが、それを為し、日光に眩しく晒される。Martin に背を押され、前に進む。Martin は歩道に通ずる階段を二段下り、彼の前へ行く。Gottfried は右側六、七メートルにはマシガンの武装民兵隊とトラックを見る。そこでは四つ目格子による境界封鎖が民衆と彼等の間で行われている。左側の運河に架かった橋の上には西側の警官とフランスのジープとカメラをぶら下げた報道員達がいる。彼は官庁の建物の側面や木々や人々を目前にし、埃や運河の水や晩夏の臭いに包まれ、複雑な気持ちで右にも左にもそれ以上進めず、彼の方を振り向いた武装民兵隊に引き下がる様に叫ばれる。西側の警官からも周囲の民衆からも目覚めた、緊張した暗示的視線を向けられ、報道員に写真を撮られる。Martin が彼から離れて行った時、彼の麻痺したような状態、無効な奇妙な感情は失せ、彼にいつもの如く機械的に続こうとするが結局彼は萎縮し、妻の Marie を思い出し決断しない。全ての人が Martin の方を見て、彼は存在しないかの如くであり、故に彼はゆっくりと後ずさりし、後ろ向きに階段を二段上り、背後にドアを感じ、取っ手に手をかけた時、彼は顔を左に向け、Martin が橋を渡り、報道員と警官に囲まれ、激しく身振りをする人々の渦の中に沈むのを見た。一方彼は気付かれずに病院の建物に戻る。夜、家に戻った彼は眠っている Marie の隣の床に入り、彼女の寝息や時計の音を聞き、手足が重苦しく硬直した如く感じ、彼女の髪に触れ、彼女が寝返りを打った時、呼吸を止める。そこで朝と同じ夢を見て、同じ Martin の台詞を聞く。やはり最初は安堵感を、次に狼狽を思い出したが、

今やその狼狽が何故起こったのか知ったと述べ、以下の彼の言葉で此の作品は終わる。

「私は自分が全く大声ではっきり言うのを聞いた。私が事実上は Martin の側に居た事を、そして何故彼がその事をあたかも私のアリバイを友情から支えるかの如く人々の前で言い、それが事実であり、それが真実であると言わないのか理解出来ない事を。真実と自分で言うのを聞き、その言葉は壁から百倍にも分裂し私に戻り、私は痛みの余り両耳を押さえざるを得ず、両目を閉じ、あたかも何か非常に硬く持続的な物が私の中で分裂したかの如く感じた。それから私は眠り込んだ。」⁵³⁾

何処から見ても当局と Stasi に好ましい作品とは思われない。

(VII)

第十四作として登場するのは Rolf Schneider の『ハンナ』(Hanna) である。彼は 1975 年 12 月、IM »Martin« によって此のアンソロジーへの参加を思い止まるように暗示され、それに応じると語り⁵⁴⁾、結局は参加した作家であり、ハンナと言う少女を主人公にした此の作品の内容は平凡である。壁構築前のベルリン郊外東ドイツの緑地に住むハンナは、自然を楽しみ、読書をし、ベルリンに向かう都市鉄道の音を耳にする生活を送っている。その地域は夏向きのバンガロー式住宅を改造した住居が多く、戦前ベルリンの借家に住んでいた人々が空爆に会い住むようになったのであり、その様な自然と生活を作家は描写する。

彼女の兄弟姉妹の父はそれぞれ違い、彼女の現在の父は義父であるが、西ベルリンのジーマンスの労働者であり、それ故に、給料の一部を西のマルクで貰い、老人達とその死が多い此の貧しい地域でも西のテレビのコマーシャルにある商品を手に入れる事が出来る。ハンナは従って西ベルリンの Charlottenburg や Tegel、Neukölln に行く事もあり、それは彼女には別の世界であり冒険であった。市電の乗客は先ずベルリン市との境界で制服の警官による身分証明書の検査を受け、市電の終点より都市鉄道に乗り換え、三十分以上走り、西側との境界の鉄道駅 Friedrichstraße で再び検問を受け、そこでは大きな荷物を持つ

た乗客が降ろされる事がある。拡声器は民主主義ベルリン最終駅と知らせ、その先は西側で、Tiergarten、高層建築の多いHansaviertel、Zoo 駅と続く。Zoo 駅の混雑の中では、両手をポケットに入れた男達が西対東と言う言葉を祈り言葉の様にしぶとく呟いている様な時代でもある。ハンナは西ベルリンの排気ガスの臭いや、繁華街 Gedächtniskirche の屋台の焼きソーセージやケチャップの香りを嗅ぎ、Wittenbergplatz や Hallischer Tor の豪華なデパートで母に手を引かれ、暖かい乾いた空気や石鹸、光沢仕上げ剤の臭いに目眩を感じ、それには玩具によるファンタスティックな疼きも、硬貨で白い自動販売機より手に入れるソフトアイスも助けにならない。

或いは彼女は兄 Werner と西ベルリン Kurfürstendamm の明かりと色彩豊かな映画館ではないが、占領地区境界線近辺 Neukölln の Kochstraße や Karl-Marx-Straße の場末の映画館へ行き、西部劇の決闘場面に恐怖を抱き、夢に見たりする。両親、全兄弟姉妹と日曜日に行く Tegel の Havel 湖では泳ぐ人々やヨット、モーターボート、釣り師を目にし、ジャズを聴き、父の嘗ての戦友が経営する野外レストランでは、その戦友や他の仲間とビールを飲み、談話する父の姿を見る。彼女は経営者からただで貰った皿入りのアイスクリームを食べ、椅子から離れ、垣根越しに湖を眺める。最後に此の作品は次の文で終わる。「向こう岸には藪や木々があった。それ程遠からず、そこへ泳いで行くのにはそれ程苦勞もせず、時間も要しないだろうが、誰も試みなかった。何故なら樹冠の向こうに一つの監視塔があったからだ。そこは境界で、その背後に彼女、ハンナが住んで居た国があった。彼女は、大人達の会話のこちらとか向こう側と言った言葉全てを完全には理解しなかった。彼女はただそう言う物があったと言う事のみ知っていた。彼女は野外レストランの垣根の所に立ち、Havel 湖を見た。彼女はしばし退屈を感じた。彼女はまたすぐに草臥れた。」⁵⁵⁾

正に起伏のない平凡な内容の作品ではあるが、その舞台は西側世界中心であり、東側住民の西の豊かな生活と文化への憧憬を描写していると言えないわけでもなく、最後の引用文も含めて、この様な作品が危険な作品として東側当局の注目を引かなかったのかと考えてしまう。

続いて収録されている第十五作は Dieter Schubert の『五つのかなりファンタスティックな物語』(Fünf ziemlich phantastische Geschichten)であり、短い五つの物語からなる。最初の話は『弾道学』(Ballistik)で、主人公(?)は私(サッカーボール)の広範囲な友人の中の出来たら生存中にサッカーボールになりたがったテニスボールである。彼等が子供達が遊ぶ広場で会う度ごとに、既に表面が擦り切れ始めた後者は前者の大衆の間での人気と競技の際に唯一使用されるボールであり、蹴り損なっても変えられない事を羨む。或る夏の午前、私は Cantianstraße のスポーツ場で彼に会ったが、彼が話しかけなかったら、彼を間違いなく認識出来なかったのだ。彼が脹らんで、サッカーボールの大きさになっていたからだ。彼は自分以上の事をしなければならないと私に言ったが、彼は十代半ばの子供達にパスされ、ドリブルされ、ウィングからセンターに投げられ、ヘディングされ、シュートされても、常に外れゴールネットへ行かない。それどころかネットを遙かに超えた。少年達は諦めて広場を去る。テニスボールとしての習性を超えるのには時間がかかるというわけである。単なるファンタスティックな物語として読むべきか? 或いは大衆は容易に撰ばれた者になれないと言う暗示なのか?

二番目の物語は『短い夢』(Kurzer Traum)で、私は夢の中で一台の夢の車を発明し完成した。それは、事故に遭いそうな時、オートマチックに機能し、それを直前に避けたと言う特徴と排気口からは新鮮な森の空気と草原の空気を排出した特徴を備えていた。故に、その輝きのない外見は問題になるとは思いつもしなかったのに、Unter den Linden から来た引き取り委員会は、その議長の問いに私が答える以前に、私の完成した車に目もやらず、私の車の隣にあった漆黒で光沢豊にラックを塗られた流線形の豪華なリムジンの方へ行き、私の昔のラテン語の教員に似たその議長は「素晴らしい」と叫んだ。そのリムジンと議長を取り囲んだ委員達も「そう、素晴らしい」と繰り返した。ラテン語の教員の場合は私がラテン語をうまく引用出来なかった時、皮肉を込めて「素晴らしい」と言ったのだが。更に議長が「非常に代表的な車だ」と言うと、その言葉が口から口へと繰り返される。最後は「代表的」(repräsentativ)から、繰

り返されるその言葉の後半（... präsentativ）を経て、「馬鹿者『現在形』（Präsent）だ、『未来形』（Futurum）ではない！」⁵⁶⁾と教員は言った、と言う言葉遊びがあり、私は夢を見たのだ、で此の作品は終わる。この小品も国産車よりも外国車に拘る議長、議長の言葉を鸚鵡替えしする取り巻きへの皮肉、そして議長を DDR 国家評議会議長と読むことは読み過ぎだろうか？

三番目の話は『敗北者が勝ったのか、それともスペシャリストか』（Der Verlierer gewann oder: Der Spezialist）である。私はレスリングを見ている。一方はレスラーなのに他方はスポーツ選手ですらなく、レスリングを見た事も聞いた事もない男である。勝敗は明かでその男はレスラーの肩に担がれ、倒される。そこで楽団が楽器を奏で、ダンスがある。男は立ち上がり相手に改めて掴みかかるが、彼は再び倒される。楽団は奏で、ダンスがある。また男は勇気を出して…、と言う事が繰り返され、「十七回の勝利の後、『好きにするが良い』とレスラーは言い、急いで会場を去る。彼は多分世界をもはや正しく理解しなかった。」⁵⁷⁾でこの作品は終わる。十七回とは？ 世界をもはや正しく理解しなかったレスラーとは？ 負けても負けても屈しない男とは民衆？ と考えてしまう。

四番目の作品は『待望の子供であったのだが』（Beinahe ein Wunschkind）であり、ベルリン及びその周囲の至る所と同様に、Schönhauser Alle に住んでいたスポーツに熱狂的な夫婦が、百六十センチ前半の大きさであったが故に、とりわけ大男達のスポーツ、バスケットボールに熱中し、妻が妊娠した時、背の大きな男子を望み、バスケットボールの選手にしようと思ったと言う所から始まる。望み通り男子が生まれ小さかったが、栄養分で日増しに背が伸び、十二歳で父を越え、居間の棚の上に置いたバケツに父より、より多く球を入れた。家族は全てのバスケットボールの試合を観賞し、息子が百九十二センチになった時、スポーツクラブへ入れ、トレーナーはその息子の大きさと実践的、理論的知識に驚く。彼は生まれながらの選手となった。しかし或る春の日、彼はやはりスポーツ好きな最初の恋人と競馬を見に行き、如何に小柄な騎手が馬で走ったかを見た。「悪魔のように、彼等は走ったと思わない？」と彼女が言い、彼もそう思った。「その日以来、彼は以前に当然で良く正しい感じていた多くの

事を疑った。そして試合毎に彼のポイントは少なくなった。』⁵⁸⁾と作品を締めくくる。東ドイツのスポーツ選手優遇策への風刺か？

第五の話は『青の驚異』(Das Blaue Wunder)である。東ベルリンのスポーツクラブで青いパンツと驚異的な目の良さで『青の驚異』と呼ばれていた新しいボクサーが Pratergarten で戦うのを私は見た。彼は相手が打とうとすると素早く見抜き、三ラウンド一発も撃たれぬが、相手の頭に軽い打撃を五六発与え、採点でポイント勝ちを得た。しかし、本格的な K.o. を望む観衆は口笛を吹いて不満を示した。「彼には闘争本能がないし、危険への勇気が欠けている。』⁵⁹⁾とスポーツジャーナリストが言った。党のスポーツ関係役員もトレーナーも似たような事を望み、此の彼に欠けている特性を教え込む努力をした。その上彼はいろいろとだらしがないのでそれも直そうとした。半年後私が彼をリングで見た時、右か左か忘れたが、あの目の良さを失い、有能にしっかりと闘い、がむしゃらさと危険への正当な勇気を示し、勇敢に相手を打ち込んだが、相手にも勇敢に打ち込まれ、最終ラウンドではほぼ K.o. される所まで行っただが、ふらつく足で再び闘いそれでもポイントで勝ち、人々は熱狂した。個々人の特性を奪う画一的教育への作者の非難と見えなくもない。D. Schubert は東独の政権党、社会主義統一党 (SED) 文化政策を公に批判した故に、1979 年作家同盟から除名されたが、此の作品への当局及び Stasi による批判は見られない。ファンタスティックの物語と言う形式を取っている故であろうか？

第十六作は Helga Schubert の『今晚』(Heute abend)であり、仕事を持った或る女性の終業時間後、帰宅迄の短い時間の平凡な出来事を描いている。一日中雨が降った後のまだ湿っぽい、濡れ落ち葉が歩道に張り付いているベルリンの街を彼女は仕事部屋の開いた窓より眺めた。その日彼女は非常に疲れを感じ、出来ることならビロードの幕で閉じられ、何も聞こえず、何も見えない輿で運ばれ、家では熱い紅茶を出され、安楽椅子に寄りかかり、何も話したくないと思う。或いは腕を組み、目を閉じ、家へ連れて行かれ、何事にももはや責任を負わされず、完全に放任されたいと思い、或いは、以前彼女が仕事を終えた母親を都市鉄道の駅で時には一時間も待って迎えた様に、迎えられたい、

途中迄でもと思い、或いは家で待機され、ドアを自分で開きたくないと思う。しかし、家に電話をかけると、まるで期待されていたみたいに、まだ誰も帰っていない。彼女が職場の出口のドアを堅く閉じた時、守衛詰め所には既に誰も居ない。彼女は上述の理由により急いで帰宅しようと思わない。一人の同僚は彼女を追い越し、市電の方へ急いで行く。彼女が少女時代の事を思い出しながら歩いて行くと、西ベルリンナンバーの古い型の白いメルセデスに乗った男がコーヒーへと誘うが、彼女は断る。彼女は彼の生活を想像する。昨日、刑事に自殺したと思われる老女の事を聞かれた馴染みの八百屋の所を今日は通り過ぎ、都市鉄道の駅へ来て、急いで階段を上り下りする人々を見たが、彼女には乗るのに早すぎた。故に彼女は市場用のホールを抜けての道を家の方に向かって歩いた。市場の入り口では料金を払って体重を量り、ガラス商品店、靴屋を覗き、缶詰めの魚を試食し、多くの店が閉まっているのを確認した。彼女等の住居が見えた市場の出口の所へ行き、階を数えて上の方を見たが彼女の階はまだ暗かった。そこで更にショウウィンドーを覗く、缶入りソーセージ、大型冷蔵庫、小さい菓子類。閉館直前のハンガリー文化会館で絵画展を観て、説明を受け、子供が成長し、夫が死んでから七十歳で絵画を描き始めたグルジア女性の絵画を鑑賞し、その画家に会い、皆と共にシャンパンを飲んだ。彼女がその文化会館のドアの前に立ち、再び階を数えて彼女の住居の窓を見た時、明かりが灯っていたのを見た。彼女は十字路を越え、噴水の脇を過ぎ、ベンチや椅子の所を通り、彼女等の住宅地の前のステージ、ソーセージやサイダーの女性の売り子、酔っぱらい、旅行客、停車中のバスの側を過ぎ、住居の壊された窓ガラス附き入り口を抜け、百番程の番号のある呼び鈴附きのインターホンの所を通り、切断された非常呼び出し電話付きエレベータ室へのドアを開け、名札の剥がれた百程の郵便受けの前を過ぎ、エレベータを待つ人々の後に並んだ。彼等は途中で止まってしまった別のエレベータからの叫び声と拳で叩く音を聞いたが、待っている人の一人が管理人へ連絡したと言うと静かになった。彼女は来たエレベータに乗り、最上階の九回で降り、廊下を走り、ガラスのドアを開けては閉め、番号附きの部屋部屋の側を通り、階段を上り、階段用吹き抜けの周囲を

周り、最上階の階段用踊り場の目的地に到着した。彼女は鈴を押す必要はなかった、彼が彼女の足音を聞き分けたからだ。この様な起伏に富んだ物もない物語であるが、特徴と言えば、女性も働かざるを得ない、或いは女性が積極的に職場に進出していた当時の DDR の状況を示している事、そして当局にとって歓迎出来ない事は、壊された窓ガラス付き入り口、切断された非常呼び出し電話付きエレベータ室、名札の剥がれた郵便受け、途中で止まってしまったエレベータと言う表現に見られる老朽化した当時の DDR の住宅事情であろう。

(VIII)

第十七作目を書いているのは、三人目の編集者 Martin Stade で、『全てを二重に見た者について』(Von einem, der alles doppelt sah) は以下の文章で始まる。「二十年間を通して望ましい職場を勝ち取ろうと真面目に努力してきた後に、彼に奇妙な諸現象が付きまとった事を突然、確認した一人の男がいた。或る日彼は女性秘書の頭を二重に見た。」⁶⁰⁾ 彼女は口述筆記の為に部屋に来て、会議用テーブルに座って居た。彼の側には半ば丸い、特注品のデスクがあり、その背後で彼は最近特殊な考えに襲われていた。「つまり、彼は時々、半ば丸いデスクが彼を完全に監禁し、いわば彼の周囲で成長すると言う観念を抱いた。数週間前はまだ彼はデスクから口授筆記させた。今、デスクは何本かの根を伸ばし、成長に影響した秘密に満ちたエネルギーを何処からか吸い取るかの如く彼には思えた。」⁶¹⁾

ともかくその日、口述筆記をしようとして秘書の頭が二重に見え、「その女性の二つの頭は、なおその上、全く異なっていた。一つは無関心で退屈していた。別の方は注意深く、職務に熱心であった。」⁶²⁾ その事全体は、一秒間の事であったが、彼は口述筆記を先延ばしにした。彼女は出て行き、その歩みは非常に優雅で、脚は魅力的だが、その後ろ姿を見て彼は愕然とした。四本脚が二つのドアを通って行った様に見えたからだ。彼は十八階の窓より街を見下ろし、将来、全てを二重に見なければならないと言う観念に襲われる。彼には部屋の中の対象物も置き換えられ歪んで見えた。しかし左目を閉じ、右目で見ると全ては正

当に見え、両目を閉じてから両目を明けると改めて恐ろしい混乱が起こり、その後しかし突然整理され、部屋の中の対象物は今まで通り真っ直ぐな正当な位置に戻ったりした。彼は一瞬、此の高い建物での孤独感に襲われ、如何に自分が他人について知らないか、また他人から知られていないかと感じ、人々から離れて此の街の生活と何ら関係のなかった無意味な行動を取ってきたかの様な気もした。「彼は此の街を憎んでいたと言えなかったが、好きでもなかった」と彼は思い、地方から来て、数年住んでいたが、「此の街の人々と気心を通じる術を知らなかったし、そう、彼等が彼に関心を示さなかったし、彼は彼等に不安すら感じていたと彼は強く信じていた。」⁶³⁾

彼は四十六歳で、本を夜読んだりしたが、今迄は目も悪くなく健康で、朝出勤前に彼の公用車は公共プールの前に停止し、彼は十五分泳ぎ、八時にはデスクの所に座っていた。つまり彼は DDR で運転手附きと言う高い地位にも就いていた。その彼のデスクで、上述のあたかもデスクが生き始め彼を脅迫するが如き現象が先ず始まったのだ。その上、此の日の現象で彼は彼の目か頭に問題があると考え、彼の意識は正常でなく、意識の障害と考え不安になった。しかしその後また普通の状態に戻り安心したが、また数日後会議の席で対象の二重現象が起こったのである。彼の前に座っていた四人の頭が八人に見え、しかも退屈そうな顔の四人の頭と、今迄通り緊張した表情の四人の頭である。やはり右目のみで見ると正常で、左目を開くと全てが二重になった。彼は医者には行かず、文献を調べ此の現象の解釈を始めたが、或る日、彼の職務代理人も彼に対し奇妙な感情を抱いたのではないかと思い、職場の洗面台へ行き、その鏡にやはり根本的に異なる彼の二重の顔を見て驚き、何れの頭が彼のものかと熟慮する羽目になった。彼は愕然とし、両目を開けて窓から街を見た。つまり、「有刺鉄線によって引き裂かれている此の街を、二重に彼の下と彼の前に横たわり生きていて、彼には今や存在しないかの如く重要ではなかった此の街を見た。」⁶⁴⁾ 此の文章に、東西に分かれているベルリンに対する作者の風刺を見る事は可能であろう。ともかく彼は決心して、その前を毎日、公用車で通り過ぎた眼鏡店へ向かって歩いた。「久しぶりに彼は初めて一人で少しばかり街を通して

歩き、街路の人々と出来事を観察する余暇を持った。』⁶⁵⁾ また此の表現には、公用車で職場へ通い、一般の民衆の生活に無知な当時の DDR 指導層に対する作者の痛烈な皮肉を見る事も可能であり、それ故にこそ、主人公が街でも両目で全てを多重でグロテスクな広がりを見たのは当然と解釈する事も出来る。「あたかも此の都市は今既に或る恐ろしい不確かな未来へ成長して行くかの如くであり、そして初めて騒音も測り知れない物へ成長し、通りの騒音は地獄に、或る気違いじみた絶え間ない轟音と鳴動に成り、それは高いもはや区別の出来ない音へと変わっていった。』⁶⁶⁾ ので、彼は立ち止まり、絶望的になり、人間の思い上がりの無意味さが表現されていたあの Pieter Breughel の絵画「バベルの塔」を現実として思い出した。彼は左目を開いたり閉じたりして歩き、事物の変化を体験し、彼は特殊な立場にあると意識した。彼は特殊な病気であったが、他人よりも多くを見る事が出来た病気であり、特殊な知識と、印象と言う断念してはならない巨大な財産を与えてくれた病気であると考え、満足して眼鏡店へ入った。眼鏡屋は彼の話を聞き、良くある例だと説明した後、彼の両目を診察し、驚きの声を発し、彼の両目は彼の心的状態の或る意味での表現であると述べ、更に彼の症状を説明した。結局、眼鏡屋は彼の目の筋肉に問題があると述べ、特殊な眼鏡と、瞼を支える器具を勧め、その製作に時間が掛かると語り、翌日、徹底検査に再び来る様に述べた。

彼は眼鏡店を出て、全てはうまく行くであろうし、眼鏡をかける事によって老人になるであろうと考え、幾らか小幅で歩き、療養しようと思い、都市鉄道の駅へ行き左目を閉じてエスカレータでホームに上った。「ホームでは勝手が分かっていたいなかったが列車がどの様に走り込むか見て、二台の列車が同時に走り込んだらどうなのだろうか見る為に左目を開け、先へ歩き、同じ瞬間に空間へ踏み出し落下したと感じた。彼は絶え間なく落下し、ホームの上での叫び声を聞き、頭で鋼鉄の線路を打ち、開いた両目で駅ホールの二重の丸天井を見た。それは突然音を立てて避け空が見え、その空は青くて広く不気味な程静かであった。』⁶⁷⁾ 此处で此の作品は終わるが此の最後の数行は読み方次第で非常に示唆的であり、象徴的であると私は思う。それ故にこそ国家公安省宛て Stasi の

文書の中で此の作品は「役員は必然的に現実性の感覚を失うようにおびやかされている。」事を描いた作品として批判されている。⁶⁸⁾

『ベルリン物語集』収録最終作品は Joachim Walther の『釈放願ひ』(Entlassungsgesuch)であり、『危機』(Krise)と『回復』(Gesundung)の二部よりなる。物語は精神病院の病室に隔離されている男が精神医の委員会と外部世界に対して、限りなく高まる陽気な気分 of 継続的発作が和らげてくれない、彼の耳に聞こえる思い出の声を聞いて欲しいと願い出る文に始まる。此の彼の物語を知らぬが故に、彼等は彼を精神的症候群と判断したと彼は考えており、彼の物語を語る事で彼を彼の危機克服後に強制的に精神医学上の症例とした事が如何に逆説的であるか証明したいと述べる。彼の内的世界の代わりに外側の世界を診断する動機を与えたいからだと彼は語る。

彼の思い出は古典古代のリプリントされた重要な作品や現代の知識、熟慮の結晶を揃えた一軒の書店に始まる。その書店で彼は彼の尊敬する世界的に著名な N 教授を見たが、その教授はあれやこれやの書を手に取り、最初は渴望する様に関心を抱き、カバー折り返しの内容紹介や前書きを読むが、結局忌み嫌う様な仕草で書を棚に戻し一冊の本も決める事が出来なかったのである。彼は此の知識の宝庫とも言える教授も彼と同じ様な危機に直面していると考え。彼は知識を取り入れれば入れた程、全てが努力に値しなかった如く思えたからである。彼は故に不承不承、書を脇に押しやり、その代わり何時間も緊張して、仮想の一点を窓から眺めたので、肉体的に疲弊し、さもなければ全く完全な神経と言う衣が攻撃され、妻とのセックス不能に陥ったのである。彼は自分が無教養な人々より多く知っているに過ぎず、究極の知識は何ら得られなかったことを確認した。

例の教授は書店を去り、目標を求めて何かに向かって歩き、後を追う彼は教授が突然歩みをゆるめ、内側の抵抗に逆らいながら苦勞して先へ進み、マイスターの店の前に立ったのを見た。誰もが知る聖書の販売店である。彼も勿論、書の中の書と言われる聖書の事を知っていた。彼は聖書の最も鋭い敵対者である教授がそこに来た事に驚くが、躊躇した後に教授はその店に入る。彼は店の

ドアの陰に立ち、全能のマイスターと服従的な教授との対話を途切れ途切れに聞くが、最初から教授は論争に於いて防御的で、マイスターの立場は確固たるものがあった。その後ドアが激しく開かれ聖書をコートの下に隠した教授は蹣跚めきながら飛び出し、対話の最中既に教授からの距離を感じ始めた彼の心に教授のその姿が突き刺さる。彼は痛みと同時に第二の自我が彼に囁き始め、新しい感覚が彼の脳裏に広がり、危機が消え去るのを感じ、彼の中の全てはそのマイスター、彼の新しい先生へ惹かれて行ったのである。彼はその店へ入る。第一部の『危機』は此处で終わる。此のマイスターとは、聖書とは何を意味するのか考えて見たくもなる。

彼の『回復』が始まる。彼は店に入り、すぐにマイスターの足下に身を投じ、容赦なく彼をむち打つように要請した。今迄の努力のひどい虚しさから解放される事を望んだのであるが、マイスターは彼を立たせ、奉仕とは生涯を通じて許し与える事と無条件の自己放棄によって成り立つと教え、棚に展示されている聖書の埃を払う仕事を彼に任せた。彼は今迄の彼の実存の根本的過ちは、指示された事を従順に実施するのではなく、絶えず性急に質問する事にあったと理解し、埃一つない場合でも埃を払う意味を問わずに仕事に従事した。彼の仕事は此の一日マイスターの為の援助によって広がる。それは食事の用意、住居や売り場の掃除、食糧の購入、マイスターの足を洗い、足の裏を擦り、にきびを除去し、唾を吸い、店の倉庫から聖書を絶えず補給し、とりわけマイスターの意向を注意深く予感する事とあるが、此处まで読むと、此の辺りは彼の妄想の結果かと考えて、その徹底した卑屈なまでの服従の意味を解釈したくなる。彼はマイスターの言動に着目した。その日マイスターが店へ来た一人の母親のヒステリックな抗議を無視し、その母親の小さな子供を奪い、その子供を抱き、彼に著名なカメラマンを電話で呼び出す様に命じ、下水道へ飛び込み、その子を救ったかの様に振る舞い、カメラマンの到着を待った。その写真は当日の夕刊に掲載され、情勢は一変し、その日の内に熱狂した母親達が店に押し寄せマイスターを賞賛した。彼は配達された郵便の中に、例の教授の電報を見出し、教授がマイスターの權威を崇め、あらゆる自分の言葉と文字による以前の誤謬

を公に撤回したと知らせてきたのを知り、また賞賛の書簡を見出した。しかしその間、ドアが激しく開かれ一人の男が「欺瞞」と言う言葉を連発しながら飛び込んで来てマイスターとの口論になった。二人は知人である様で、マイスターの「君、我々是一緒に考えよう。我々が素晴らしい様子を破壊したら何が我々に残るのか?」と言う声が聞こえ、興奮した相手は「何故に、誰も、誰一人、皇帝は裸だ言おうとしないのか? 何故に?」とわめき、マイスターは「我々は考えてみよう、我々は思い出してみよう。こんな事は一度だけ起こったのだ——童話の中で。我々はそんな事をとくに知っている。何故に我々は来ているのだ、小さなお馬鹿ちゃん、他に私に対して何かあるのかい?」⁶⁹⁾と答え、意味深長な対話となった。結局、権力は必要なのだと言う事になり、その男は退散した。続いて起こったのはマイスターが電話で何かを言い、彼は「第四段階」と言う言葉のみを聞いたのだが、やがて救急車がやって来て、マイスターが重病人を迎え入れ、その無意識とも見える病人が聖書をしっかりと両手に握り、野次馬に見送られて去って行った事件であり、それは彼にも強い印象を残し、その日一日の売り上げは伸びたのである。彼は続いて否定的な言い回しや笑いが不文律としてマイスターの店では禁ぜられている事を学んだ等と述べた後、彼は最初の日、聖書を読む時間は皆無であったが、客の顔に聖書が如何に深く永遠なる真実を秘めていたか読む事が出来たと述べ、その理由として、彼等の顔が安らぎと満足感を示していた事、分に案じ、彼等が多分以前横柄に独自の思考と呼んでいたものを結局断念した従順さを挙げた。彼の場合も同様であり、彼は今や一度失った精気を取り戻し、次の休暇には彼の妻を満足させようと思った。その様にして、彼が新しく獲得した自由の一日は何も望む事のない幸せと、内的自己満足と無条件の従順の内に過ぎ去り、彼が引き続き留まっていいと言うマイスターの言葉で終わった。

翌日彼が約束通り、朝早く店に来た時、驚いた事に彼はマイスターが病で床に就き、もう駄目だと知った。マイスターは彼の耳に聖書の一節を呼んで欲しいと囁き、彼は急いで聖書を取ってきてマイスターの前で開くとそれが装丁見本で何も印刷されていないの知った。彼はマイスターに謝るが、此の事がマイ

スターを朗らかにした様に思われた。何故なら彼が改めて聖書を取りに戻った時、彼は背後に静かな忍び笑いを聞き、彼が次の聖書も印刷されていないのを確認し、ある種の理解できないエクスタシーに陥って手に届く全ての聖書を開き、救い様のない失望感で投げ出した時、その忍び笑いが高まったからである。そしてその笑いは余りにも激しい爆発になり、地獄の様な呻き声となり、喘息性の気管支に影響を与えマイスターは死亡した。

同時に聖書の内容の虚しさに就いて彼の失望が消えたのと同じ程度に、抵抗し難い朗らかさが彼を捉え、彼はマイスターの笑いを引き継ぎ、笑い続けたが、長い時間がたってから救急医と白い上っ張りを着た二人の頑丈な男が来て彼を有用な担架に縛り付け、此の隔離施設へ連れて来たと彼は語り、彼の思い出の物語を閉じた。従って此の施設は彼の行動の自由を制限出来るが、彼の全てを包み込む笑いを制限する事は出来ないし、既に看護人の半数が笑いに感染し、所長も彼が現れる時には、その歯を机の木の角に打ち付け堪えているので、彼の即時釈放を願い出るのである。彼は精神医の委員会も同意すると考えている。何故なら世界に広がる朗らかさの発生は防げられないからである。

此の作品に関する Stasi 及び当局の批判めいた論評はない。しかし誰もがこの作品より受けるイメージはあの二十年代のドイツ表現主義映画『カリガリ博士』であろう。『カリガリ博士』の場合、映画は脚本家の意図に反して全てが患者の妄想とされてしまった。此の作品の主人公である男の述べた物語は妄想であるかどうか判断出来ない。妄想でないとしたら、作者は何を言いたかったのか、教授が結局屈服した聖書とは DDR 政権党の綱領なのか、そうだとすると最後に虚しい聖書の内容は意味深いものとなる。マイスターは何を象徴しているのか？ 聖書の内容の虚しさを知った彼は施設に収容される。何となく了解の就く話しでもある。しかし作者が主人公の物語を妄想であると言う事を想念に入れていたとしたら、当局の批判を逃れる優れた手段だとも思われる。しかし作者は単に一つの患者の物語と考えたのかも知れない。何れにしろ当局は此の物語を批判的には捉えなかった。

注

- 1) 酒井府: 『『ベルリン物語集』と国家公安省』。『ドイツ学研究』。獨協大学。第 47 号。2002 年 3 月。第 48 号。2002 年 9 月。を参照せよ。
- 2) Berliner Geschichten »Operativer Schwerpunkt Selbstverlag« Eine Autoren-Authologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde Herausgegeben von Ulrich Plenzdorf Klaus Schlesinger Martin Stade. suhrkamp taschenbuch. 1995. S. 250. Z. 29S. 251. Z. 6.
- 3) ibid. S. 224. Z. 18–21. Z. 24–30.
- 4) ibid. S. 224. Z. 39S. 225. Z. 5.
- 5) ibid. S. 26. Z. 28S. 27. Z. 1.
- 6) ibid. S. 30. Z. 4–11.
- 7) 1bid. S. 30. Z. 17–20.
- 8) ibid. S. 31. Z. 1–25.
- 9) ibid. S. 31. Z. 34S. 32. Z. 4.
- 10) ibid. S. 38. Z. 17–19.
- 11) ibid. S. 42. Z. 1–10.
- 12) ibid. S. 48. Z. 11–17.
- 13) ibid. S. 50. Z. 29–32.
- 14) ibid. S. 51. Z. 12–15.
- 15) ibid. S. 52. Z. 31–S. 53. Z. 2.
- 16) ibid. S. 56. Z. 31–32.
- 17) ibid. S. 57. Z. 6–10.
- 18) ibid. S. 225. Z. 17–21. Z. 24–26. 及び上述の『ドイツ学研究』。第 47 号。15 頁を参照せよ。
- 19) ibid. S. 76. Z. 32–33.
- 20) ibid. S. 77. Z. 37–S. 78. Z. 2.
- 21) ibid. S. 81. Z. 33–37.
- 22) ibid. S. 83. Z. 15.
- 23) ibid. S. 93. Z. 13–18.
- 24) ibid. S. 95. 22–33.
- 25) ibid. S. 97. Z. 16–19.
- 26) ibid. S. 97. Z. 35–S. 98. Z. 4.
- 27) ibid. S. 225. Z. 8–11. 及び上述の『ドイツ学研究』。第 47 号。15 頁を参照せよ。
- 28) ibid. S. 225. Z. 38–S. 226. Z. 5.
- 29) ibid. S. 99. Z. 5–12.
- 30) ibid. S. 100. Z. 10–17. Z. 20–24.
- 31) ibid. S. 103. Z. 20–27.
- 32) ibid. S. 106. Z. 11–12.
- 33) 此の作品に関しては嘗て私は「Robinson Crusoe Im Schrebergarten? — Wieder über „Die neuen Leiden des jungen W.“ und noch über „Die Legende von Paul & Paula“ von Ulrich Plenzdorf — 『ドイツ学研究』。獨協大学。第 7 号。1977 年 11 月の中で論じている。
- 34) Berliner Geschichten: a. a. O., S. 110. Z. 35–S. 111. Z. 2.
- 35) ibid. S. 117. Z. 15–21.
- 36) ibid. S. 117. Z. 29–35.

- 37) ibid. S. 123. Z. 38–S. 124. Z. 15.
- 38) ibid. S. 124. Z. 32–38.
- 39) ibid. S. 125. Z. 10–15.
- 40) 上述の『ドイツ学研究』。第 47 号。22 頁、及び第 48 号。74–75 頁を参照せよ。
- 41) Berliner Geschichten: a. a. O., S. 128. Z. 36–37.
- 42) ibid. S. 132. Z. 35–37.
- 43) ibid. S. 136. Z. 8–12.
- 44) ibid. S. 136. Z. 37–S. 137. Z. 7.
- 45) ibid. S. 137. Z. 35–38.
- 46) 上述の『ドイツ学研究』。第 48 号。89–90 頁を参照せよ。
- 47) 同上。90 頁を参照せよ。
- 48) Berliner Geschichten: a. a. O., S. 144. Z. 2–6.
- 49) ibid. S. 162. Z. 15–18.
- 50) ibid. S. 162. Z. Z. 18–29.
- 51) ibid. S. 163. Z. 10–15.
- 52) ibid. S. 164. Z. 13–14.
- 53) ibid. S. 168. Z. 1–11.
- 54) 上述の『ドイツ学研究』。第 48 号。64 頁を参照せよ。
- 55) Berliner Geschichten: a. a. O., S. 176. Z. 17–26.
- 56) ibid. S. 178. Z. 25.
- 57) ibid. S. 179. Z. 13–15.
- 58) ibid. S. 180. Z. 25–31.
- 59) ibid. S. 181. Z. 19–20.
- 60) ibid. S. 187. Z. 3–7.
- 61) ibid. S. 187. Z. 13–19.
- 62) ibid. S. 187. Z. 27–30.
- 63) ibid. S. 189. Z. 18–19. Z. 28–31.
- 64) ibid. S. 193. Z. 26–29.
- 65) ibid. S. 193. Z. 32–34.
- 66) ibid. S. 194. Z. 5–10.
- 67) ibid. Z. 199. Z. 13–23.
- 68) 上述の『ドイツ学研究』。第 47 号。16 頁を参照せよ。
- 69) Berliner Geschichten: a. a. O., S. 207. Z. 36–S. 208. Z. 5.

Die Erzählungen in den „Berliner Geschichten“

Osamu SAKAI

1995 wurde unter dem Titel “Berliner Geschichten” eine Anthologie von Erzählungen von 18 Autoren der ehemaligen DDR als Taschenbuch von Ulrich Plenzdorf, Klaus Schlesinger und Martin Stade bei Suhrkamp herausgegeben, das eigentlich schon in den 70er-Jahren, also noch zu DDR-Zeiten von denselben Herausgebern erscheinen sollte. Dass es zu jener Zeit in der Schublade verschwunden ist und nicht publiziert werden konnte, habe ich schon einmal dargelegt, sowie die Erklärung im Vorwort und die Dokumente der Herausgeber und der Staatssicherheit (Stasi), die diese Edition verhinderte, analysiert (Dokkyo Universität Germanistische Forschungsbeiträge, Deutsche Abteilung der Fremdsprachenfakultät, Nr. 47, Nr. 48, 2002).

Aber ich habe noch nichts über die 18 Werke, die in dieser Anthologie aufgenommen sind, gesagt. Darunter gibt es Erzählungen, die absolut nichts mit einer Kritik am DDR-Staatssystem zu tun haben, also sich nach der Auffassung der Stasi im Bereich des Erlaubten von Seiten des Staates oder der Regierungspartei SED befinden. Aber es gibt darunter auch Erzählungen, die einen Anlass boten, dem Verlag diese Anthologie zu verbieten, wie in den Dokumenten der Stasi erwähnt wird.

Nach meiner Meinung gibt es außerdem darunter Werke, in denen nicht nur Kritik am DDR-Staatssystem steckt, sondern auch hintergründige Anspielungen, die die Stasi wohl nicht bemerkt hatte.

Als solche Erzählungen möchte ich z. B. „Transportpauke in Berlin“ von Paul Gratzig, „Hanna“ von Rolf Schneider „Fünf ziemlich phantastische Geschichten“ von Dieter Schubert „Heute abend“ von Helga Schubert und das „Entlassungsgesuch“ von Joachim Walther erwähnen.

Ich möchte daher in der vorliegenden Abhandlung die 18 Werke der „Berliner Geschichten“ erläutern und analysieren.